



今日のイギリスは、あすの日本

やました 山下
ただし 正

イギリス在住・翻訳家

イギリスは階級社会だと言われます。

日本のように背広を着れば、現場労働者も事務職サラリーマンも区別がない、ということはイギリスにはあてはまりません。古典的な意味での「被搾取階級」としての労働者というイメージもいまだに確固として残っています。「階級」と「階層」は混用されており、厳密な定義となるとややこしいですが、とりあえず「階層」というニュアンスでとらえると、日本に比べてイギリスはたしかに均一的な社会ではありません。

イギリスではこうした階層を、アッパークラス（上流階級）・ミドルクラス（中産階級）・ワーキングクラス（労働者階級）と呼びます。そしてミドルクラスがまた上・中・下に区分されるわけです。上流階級というのは数パーセントで、中産階級と労働者階級が半分づつぐらいだろうと思います。2007年10月に発表されたある世論調査（ICM）によると、自分は労働者階級に属していると自覚しているものが55%。中産階級と思うものが41%となっていました。

肉体労働者と三次産業従事者（事務職サラリーマンあるいは中間管理職）は本来同じ労働者階級として括れると思いますが、イギリスで通常、労働者階級（ワーキングクラス）というのが前者、中産（＝中流ミドルクラス）階級というのが後者に該当すると思います。ところでこの両者には実に大きな差があります。たとえば、ことばが違います。「英語だから同じだろう？」というわけで

はありません。江戸っ子のべらんめえ口調とNHKのアナウンサー言葉以上の違いがあります。労働者が使う英語は、くだけてテンポが速いのです。それから体型が違います。彼らは猪首でずんぐりむっくり。だいたいビール腹で赤ら顔。つまりことばと体つきが違うわけですから、同じイギリス人と言っても別の人種のようなものです。そして大きな地域差があります。労働者の住む地域は、いわゆる下町風で家の作りから町の雰囲気までまったく異なります。乗用車も一般労働者がベンツに乗るといことはまずありません。飼い犬の犬種まで階層によって違うと言われるのです。

「一億総中流」と言われた日本（いまは若干違うでしょうが）とは違って、イギリスは労働者階級が現業労働者と事務職労働者に分断されて、階層の差が一種の「階級対立」になっているところが現代の特徴のように思います。つまりイギリスの中産階級は、実態としては労働者階級としての被搾取者であるにもかかわらず、意識は労働者を差別する側に立っているという内部矛盾があります。

サッチャー首相がこの階層の違いを拡大して、ブレア首相はその総仕上げをしたわけです。つまりブレアは労働党を名乗りながら、労働組合との連帯をはかるのではなく、労働者を「くびき」ととらえてきました。彼はグローバリズムという名の新資本主義の衣をきらびやかにするために「第三の道」という政策を掲げました。この政策の一



環としてブレアは労働党の綱領4条（産業の国有条項）を廃止し、「郵政民営化」や「公共交通機関の民営化」を断行しました。そしてすべてに「競争原理」を導入し、学校や病院も点数評価を進めました。これらはほとんどすべての項目が小泉路線が追求したものと同じです。このために、「ブレアは労働党ではなく、保守党の党首にふさわしい」と揶揄されたわけです。このひずみは年ごとに拡大し、行き過ぎた競争原理への抵抗が労働組合を中心に起こっています。先週（2007年10月中旬）は何年ぶりかの大規模な郵便ストライキがありました。こうしてブレアの労働党は自らの支持基盤を失いつつあります。

イギリスでは、2006年春から、郵便事業が完全に民営化されました。この過程で、3万人を解雇し、数千の郵便局を閉鎖、1日2回の配達を1回に減らす、など大鉈をふるいました。郵便発祥の地イギリスですが、この「合理化」により当然の帰結ですが、信頼度の低下とサービスの悪化から社会的弱者の切捨てが甚だしくなりました。過疎地で郵便局が閉鎖されたために、年寄りが困っているという新聞記事が出ます。まるで日本の数年後の姿かと思えました。うそかほんとか知りませんが年間数百万通もの郵便物が紛失するそうです。日常の仕事でも「郵便で送ったのに届かない」というケースがときどきありますから、全英では相当な数になるだろうと想像できます。

鉄道なども同様です。1994年に施設管理専門のレールトラック社と25の列車運行会社、13の軌道メンテナンス会社に分割民営化されましたが、利益追求第一で設備投資を怠ったために、多くの重大な鉄道事故を引き起こしています。間引き運転や信号故障は日常茶飯事ですし、途中でわけもなく停車したりします。公立病院は「営業成績」が悪いところを閉鎖し、学校は成績が悪いところには補助金削減です。

この一方、過去、イギリスでは縁がなかったようなスーパーをはじめ大型店舗は24時間営業となり、金融街は大型ボーナスが話題となり、グルメブームや華やかな消費文化に浮かれています。こうした消費を支えているのは中産階級です。

大雑把に言えば、競争至上主義によるおこぼれをホワイトカラーを中心とする中産階級に分け与える一方で、現業労働者はしわ寄せを受ける側においやられるという構図が拡大しているといえます。つまりイギリス労働党はもはや労働者の味方ではなく、労働者の内部矛盾であるはずの現業労働者とサラリーマンとの断絶を階級的な対立へと転化させる役割を果たしているといえます。これは日本の5年先を見るような思いがします。グローバリズムといえば泣く子も黙る世界的な潮流とあきらめがちですが、弱者を切り捨てるこうした潮流に棹さず労働組合の役割がいっそう大切になってくると思うこのごろです。